

高齢化社会をどうのりきるか。 それが君たちを確実に襲う課題だ!! 【高齢化社会と性別分業の実態】

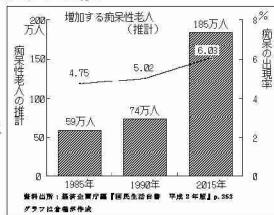
今回の「なんでやねん」は、少し難しいゾ。

「なんでやねん？」と思うかも知れないが、「高齢化社会」の問題と「家族」・「女性」のかかえる問題を、教科書(p.38)よりも少しだけ深く考えたいからだ。この「なんでやねん」は、「高齢化社会」の問題を学習するための「資料」として読んでほしい。

老齢人口の増加と要介護老人の増加

人口の高齢化が問題にされているが、特に、75歳以上の後期老年層の増加が著しく注目される。1990年9月で、65歳以上の人口は、1,488万人になった。この増加傾向は続き、「団塊の世代」¹⁾が同年齢になる2015年には、約3千万人に達するとい²⁾う。

さらに、厚生省人口問題研究所「日本の将来人口新推計」(1981.11)によれば、^(グラフ①) 2025年には、後期老年層人口(75歳以上の老人)は、男性557万4000人、女性826万5000人と推計されている。老年人口係数(老年人口を総人口で除して100倍したものの)でみると、男性では65～74歳で9.85%、75歳以上が8.89%となると推計される。



女性の場合では、65～74歳で10.95%、75歳以上が12.82%となり、後期老年層が前期老年層を上回ることになる。この後期老年層人口の増大が意味するものは、心身に障害のある老人の増加である。

痴呆老人についての全国調査はないが、『国民生活白書』が厚生省の資料を基に報告しているのは、1990年段階で74万人で、2015年には185万人(在宅者)

になると推計している(グラフ①参照)。

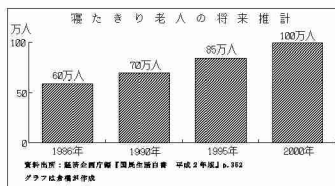
また、寝たきり老人は1990年で70万人、2000年には100万人が推計されている(グラフ②参照)。

ある学者の推計³⁾では、2025年の寝たきり老人とばけ老人(重複者を除く)人口総数は、188万7000人である。

一方、独居老人も増加する傾向にある。1989年には、老人夫婦だけの夫婦家族が415万世帯あり、一方の配偶者の死亡によって、独居老人が増加することも考えられる。1989年現在、65歳以上の老人のうち40.0%が子どもと同居しているが、この同居率は年々下降傾向にあるからである⁴⁾。なお、親子ともに、同居志向は低下してきている⁵⁾。

では、これらの老人を家族が支えるためには、どのような条件が必要なのだろうか。それを考えるのが、今日の課題なのである。

高齢化社会は、さらに大きな問題を提示する。子育て後の時間が延長され、かつての平均寿命が短かった時代の家族ないし夫婦よりも、夫婦だけの時間が延長される結果をもたらす問題である。つまり、高齢化社会は、子育てが終わった「空の巣」を再び、活気あるいは生き甲斐を感じられる夫婦家族(これが子育ての期間よりも長期間になる)が形成できるかという大きな問題を投げかける。



¹⁾ 池井幸子「老親の介護はどこまで」生命保険文化社編 山根孝男監修『ゆれ動く現代家族』日本放送出版協会 1984.9.20 pp.145-147

²⁾ 前掲 『国民生活白書 平成2年版』p.193

³⁾ 前掲 『国民生活白書 平成2年版』p.195

¹⁾ 「団塊の世代」とは、戦後のベビー・ブームに生まれた世代(昭和22年～同24年生まれ)をいう。

²⁾ 経済企画庁『国民生活白書 平成2年版』p.70